

# 社会関係とノンバーバルコミュニケーションの機能

—— B・バーンステインの言語コードを踏まえて ——

山 本 桂 子

はじめに

人間のコミュニケーションは、ウィーバー (Weaver, W.) によれば、「ひとつの心が他の心に影響を与える手続きの全てである<sup>①</sup>」と、極めて明解な定義を行なっている。そして、さらに、それは、文字や会話だけでなく、音楽、絵画、演劇、バレエ、そしてあらゆる人間の行動を内包していると付言している。

つまり、言語は、人間のコミュニケーションを大きく支持しているものであるが、非言語の果たす役割や効果を黙過することはできないといえよう。

そして、人間は、日常生活において、言語、非言語にかか

わらず、コミュニケーションの前提となる認識・伝達のために、常に符号化と解号化を行なっているのである。

本論においては、まず、「コード」ということを、このような符号化と解号化を統制し、規制する原理と定義する。そして、そのコードに関する類型を総括的に整理し、コミュニケーションプロセスモデルを図化して考察する。さらに、バーンステイン (Bernstein, B.) の研究成果をもとに、言語コードの特性を把握する。そして、最後に、ノンバーバルコミュニケーション (non-verbal communication: 以下 NV C と略す) が、どのようなコードにおいて、どのような機能を持ち、どのような効果をもたらすか、その重要性を考察する。

## 一、コードの類型と交錯

まず、社会生活の中で、人間が認識を行うコードは認識コードと呼ばれる。このコードには特有な形態をなす二つのパラダイムがあり、それらはデジタルコードとアナログコードである。

両者は、明確な違いをもっており、それぞれの特徴は、デジタルウォッチとアナログウォッチを思い浮べれば理解しやすい。デジタルウォッチは、一分ごとに切り離されていて、認識と表示が容易である。例えば、それが表示する数字が「一」であれば、それは「五分」そのものであり、「五分前」でも「五分過ぎ」でもない。他方、アナログウォッチの場合、文字盤に刻まれた数字の連続の中で、時間が捉えられる。つまり、デジタルコードが、意味するものと意味されるもののユニットが分離され、断続的に作用するのに対して、アナログコードは、それが連続的に作用するものである。

もう少し、現実生活の具体的な事例に即して、アナログコードとデジタルコードについて解釈してみよう。

ダンスは、身振り・姿勢・距離・視線といったユニットが複雑な組合せで、アナログとして作用する。表記のためのデ

ジタル化が非常に困難であるために、ダンスはアナログのままで認識されることになる。一方、音楽はアナログであるが、記譜法においては表記可能な音符や音階が使用され、デジタルコードで認識される。よって、音楽は、アナログコードで認識されるが、高デジタル化の特徴をもっているといえる。

さらに、人間と自然界について考えてみよう。自然界は一般にアナログから成り立っている。人間は、その自然を認識、あるいは類別しようとするとき、何らかの形で符号化を行なっている。つまり、人間は、それらをデジタル化し、そこに差異を見出だすことで、それらを認識するのである。例えば人間が、本来アナログである他人の性格や性質を認識しようとするとき、性差、年齢、社会的地位、またはその人との間に保たれる距離の差による親密度などのデジタルな差異で類別していることになる。

これらの具体例を踏まえれば、人間がいかにアナログ的な現実の上に、デジタルの特徴を付加することで、意味を付与しているかが充分に認識できる。

では、伝達機能にためのコードの類型とはどのようなものであろうか。

これらは「体現コード」(presentational code)と「再現コード」(representational code)と呼ばれる。

体現コードは、それ自身とその解釈以外の何ものも表すことができないコードの形態である。また、再現コードは、テキストを造るのに使われ、しかも、それ自身やその解釈以外を除いた、独立した実在のメッセージをもつ。

再現コードは、再現可能なコードとして、すなわち、主としてデジタル化されたものを表現するときに作用するコードである。また、体現コードは、現在の、しかも具体物を表すのに使用され、主としてデジタル化の低いアナログコードで認識されるものを、そのままアナログで表現するコードである。NVCの大半はアナログの形態であると考えられる。

具体的に、視線・距離・姿勢を考えてみよう。

視線には注視・凝視・無視など、様々な様相がある。そのメッセージ内容は、頻度や時間との組合せによって、複雑に絡み合い、当然、デジタル化が困難になってくる。よって、アナログのまま認識され、体現コードで作用することになる。

距離や姿勢についても、同じようなことが言える。距離は、親密な距離や公的な距離が完全にセパレートされ、デジタル化されるのではなく、それは、デジタルウォッチの文字盤に似た様相をもつ。姿勢もやはり、足の組み方や、腕の組み方、首の傾斜度、向き合う角度などの、さらに複雑な組合せによ

る表現形態となり、体現コードの特質をもっているのである。

ところが、アナログで認識されながらも、再現コードで作用するものがある。その好例が写真である。図1に示したように、(A)の場合は、明らかにデジタルコードであるが、(B)はアナログコードである。この複雑なインクのしみの連続性と統合から、彼女がイングリット・バーグマンであることを認識するだろう。勿論、彼女を知らない人にとっても彼女の存在を捉えることはできる。

さて、ここで、G・ベイトソンの研究成果を踏まえて、個人内における心的プロセスにおけるコードについて、私見を示しておきたい。

G・ベイトソンは、「デジタル的コード」、「アナログ的コード」という従来のコードにおける二つのカテゴリーに加えて、新たに「ゲシュタルト的コード」という第三のコードを提示した<sup>(1)</sup>。彼は、人間の心的プロセスの中のコードを、特にそう呼んだのである。これは、外界の事象や対象間の形態的關係を認識し、それを一定の形態的なカテゴリーに区分し、メッセージ化するコードのことである。このコードはコミュニケーションを簡略化・効率化させる機能がある。

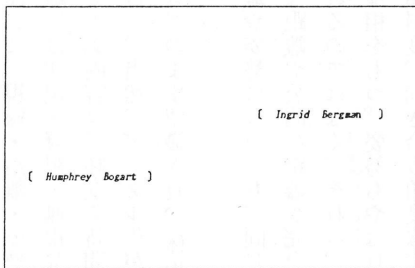
先の写真の例は、まさにゲシュタルト的コードかを行なっ

図1 デジタルコードとアナログコードとしての写真

(B)



(A)



(Schirmer Art Books, 'Schirmer's Twelve'より転載)

ているものであるといえよう。この写真を見た人々は、「点」の有無だけで、人間と捉え、さらに、女性と捉え、女優であることを認識することができる。つまり、思考中にゲシュタルトプロセスが存在すること、人間は関係だけでなく、具体的な事実について考えることができるのである。むろん、そのためには、言語の助けをかりることになる。というのは、「人間」、「女性」、「女優」、「イングリット・バーグマン」を表す言葉が、彼女そのものを想起させることになる

のである。

図2において、その位置を表すならば、メッセージが復元される過程であると言え、これは記憶することに大きく関連している。

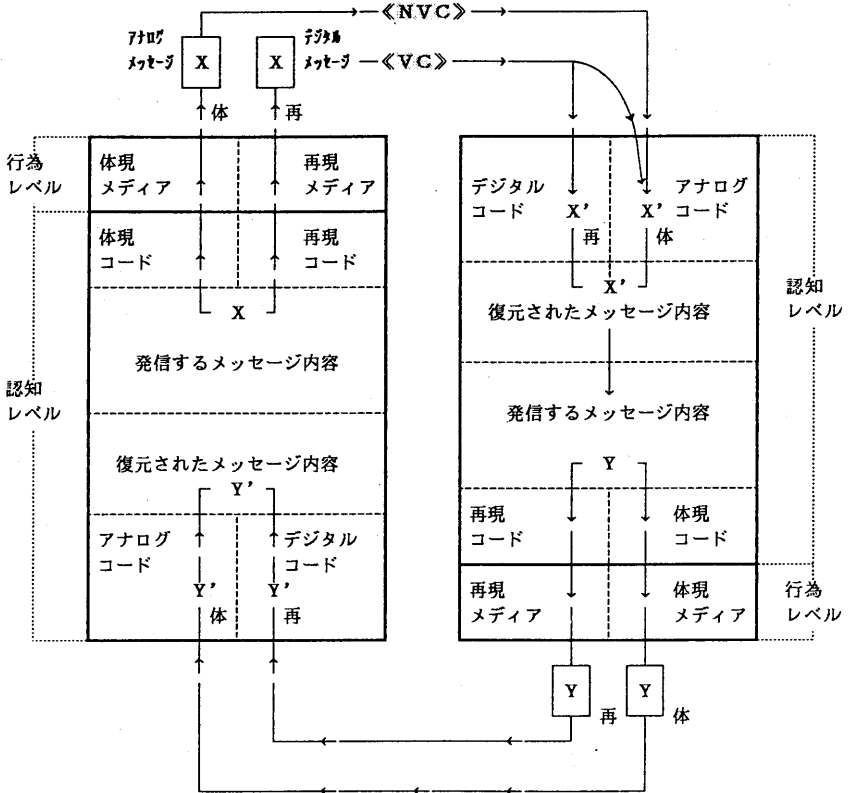
「ゲシュタルト的コード」は個人内における心的プロセスのコードである。したがって、本来の目的である対人間のコミュニケーション・システムにおけるコードに関係するものとしては、これ以上の言及を避けるが、これらのことから、写真はアナログでありながら、再現コードとして作用し、図1においては、彼女の過去の一瞬を他者に伝達することになるわけである。

以上のことから、認識と伝達が同時に起こるものでありながら、それぞれに二つのパラダイムが存在するのは、図2のような交錯が起りながら、コミュニケーションが進行しているからであり、このことを明確にしておくことが、非言語の問題についての混乱を避けるものだと考えられる。

## 二、言語コードの社会的意義

これらの認識レベル・行為レベルにおけるコードの違いが、メッセージ内容の正確なコミュニケーションを妨げている場合が

図2 NVCのプロセスモデル



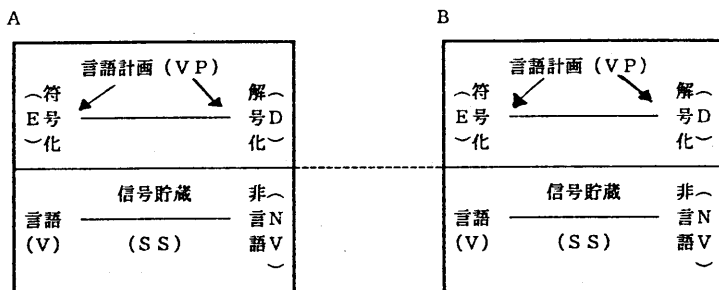
ある。コードの違いを、社会関係と言語の側面から考察してみると、その社会関係に特徴的な言語コード（ここでは、図3に示されるような言語計画を規制する原理）が、存在するのではないかと考えられる。

例えば、イギリスの産業革命以降、同じコミュニティに住み続けているような炭坑労働者、工場経営者といった、閉鎖的で伝統的なコミュニティに特徴的な言語コードの背景の一つには、連帯性や協調性といったものがあつたのかも知れない。他方、中間階級の言語コードは、ブルジョワジーとして、独自の投資計画、商品開発、学問・法律への関わりなどの中から生じてきたものと考えられる。

バーンステインは、教育現場で、認識の表出様式と社会階級（労働者階級と中間階級）との関係についての研究を行なった。彼の研究では、実際に使用している言語をその言語使用者の帰属している社会階級と関連させた分析をした。

その研究の中で、労働者階級と中間階級の

図3 言語計画とコードの関係



(バーンスティン, 『言語社会化論』 p111 より引用)

子供の教育状況について注目したのである。実際には、労働者階級の子供が、現実の学力とその潜在能力との間に顕著な差が生じてしまいうこと、また、グラマー・スクールになじめず、友達同志や教師とうまくやっていけなくて、中退学する者が多くいること、さらに、非言語知能テストに比べて、言語知能テストのできがよい、という状況を認めたのである。

彼は、この状況が、使用する言語コードに起因すると考えた。彼は、労働者階級の子供

が用いる言語コードと、中間階級の子供が用いる言語コードとの間に差異を発見し、その差異が労働者階級の子供と中間階級の子供がうまくコミュニケーションできなかったり、労働者階級の子供の学力が劣ってしまうことになると判断したのである。というのも、教師には、中間階級出身者が多いことも関連し、学校の授業は中間階級の言語コードが中心となっていて行なわれる。そのため、労働者階級の子供の耳に入ってくる言葉は、彼らにはいまひとつフィットせず、そのために、いつも奇妙な不安や緊張の状態にあり、学習効果が充分に上がらず、低学力となるのではないかというのが、彼の分析結果である。勿論、学力が記憶や再現のみで測られるものではないことや、低学力の原因が経済や環境などの様々な問題により引き起こされることは、充分に考慮されるべきである。しかし、ここでは、学力の基準や、低学力の原因の追求に焦点をあてるのではなく、言語、あるいは、非言語メッセージ内容の解釈の違いを分析しようとしたものである。

よって、ここで注意しておかなければならないことは、中間階級の言語コードが、労働者階級の言語コードより優れているということではなく、この二つの言語コードは、それぞれ別物であり、異なった機能を持っているに過ぎないということである。また、言語コードが社会階級を決定する要因そ

のものではなく、そのような社会階級に特徴的な社会関係がコードを決定するということである。

では、それぞれの言語コードの特徴を考えてみよう。中間階級の言語コードは、社会関係が違ってくればコードも変化する。例えば、会食や、仲間での寄り合いなどのときには、労働者階級の言語コードの使用が可能なのである。

ところが、その逆は成り立たない。例えば、教師の発言に、「あまり騒がないでいてくれたらいいのだけれど」（これを便宜的にAと称する）と、「静かになさい」（これを便宜的にBと称する）という二つのものがある。中間階級の子供は、直接的なBの発言に対しては勿論、間接的なAの発言に対しても、的確に反応でき、両方の発言の意味・内容に、充分に反応することが可能である。だが、労働者階級の子供は、Bの発言に対する反応しか学習してきていない。そのため、彼が、Aの発言を理解しようとすれば、自分が学習してきたコードに置き換えて、翻訳し直す必要がある。それがうまくできない場合や、授業の中で間に合わない場合に、彼らは、教師や中間階級の子供の言っていることがわからなくなってしまうのである。

このことに關して、「必ずしも語彙の豊かさといった問題ではなく、言語構造のうちの思考と感情の関係を仲立ちする

側面が社会的にどの程度重視されているか、といった問題」であると、バーンステインは解釈し、言語と社会的側面、とりわけ、社会関係との関連について分析を試みた。

バーンステインは、この労働者階級のような社会関係に特徴的な言語コードを「限定コード」(restricted code)、中間階級のような社会関係に特徴的な言語コードを「精密コード」(elaborated code)と名付けた。そして、彼の最終的に明らかにした点は、労働者階級が限定コードに限られるのに対し、中間階級は、限定コードから精密コードへと自在に移行できるということである。彼の考えた二つのコードの特性を、次の五つの点から整理しておこう。<sup>10)</sup>

第一に、語彙と文法についてである。精密コードは、高度な文体組織をもち、語彙の選択が広範囲である。一方、限定コードは、より少ない語彙で、よりシンプルな文法構造をもっている。

第二に、伝達形態であるが、限定コードは、話し言葉になる場合が多いため、NVCの体現コードにより近いのに対して、精密コードは、書く・話すのいずれの言葉でもあるので、再現的で、シンボリックなメッセージに適しているといえる。また、限定コードは、言語選択が制限されるため、組織化される意味と、伝えられるメッセージの予測不能性が高くなる

が、精密コードは、語彙が豊富なため、話し手の言語選択の予測可能性は低く、指示的機能を發揮する。

第三に、伝達内容に関してである。限定コードは、具体物、特定のものの、現在のことがらを表現し、精密コードは、抽象的なものの、概念、現在のことではないことがらも表現できる。

第四に、伝達プロセスをみると、限定コードは、集団の話し手の位置を示すことで、社会関係を補足し、個人的な相違よりも、話し手と集団との間にある類似点を明示する。これに対し、精密コードは、個人の独自の意識の説明を容易にし、集団内の地位役割よりも、個人的なものに付随する。これは、話し手と聞き手の間の、予測の心理的相違に対応していこうとするものである。このため、このコードは、聞き手とは違う話し手独自の表現を促進することになる。

つまり、精密コードは、「独自性と個人差に対する感知能力を促進する方向で話し手を規制するし、意識を組織する複雑な概念の階梯に到達する可能性をもつ<sup>1)</sup>」のである。これに対して、限定コードは、共有化された、つまり、話し手が聞き手と密接に共有する集団のメンバー間の表現を促し、前提・関心・経験の同一性と期待に基づいて表現されるのである。

第五に、出現環境についてみると、限定コードは、文化的

経験に依存するが、精密コードは、教育や訓練によって培われる。

このような言語的コミュニケーションの中で、NVCをどのように捉えるかが重要な問題である。この問題について、さらに、筆者の見解を述べておきたい。

精密コードでは、書き言葉がほとんどで精密化されているために、NVCを軽視する場合が多い。それに対して、限定コードでは、NVCを重視する傾向がある。その理由は、共同性や連帯感の中で生じる限定コードが、伝達者が現存する、しかも、関係性や状況説明のための体現コードであると考えられるからである。

そして、もちろん、NVCも体現コードであることは前述のとおりである。このように考えていくと、言語は、NVCのコードに依存したり、あるいは、一体化したりして、限定コードを成立させているとみなすことができる。ただし、先ほど述べたように、限定コードと精密コードが分析上の概念である以上、現実の社会において、どちらか一方だけが使用される状況は存在しないのである。

限定コードがNVCを重視するのは明らかであるが、精密コードにおいても、限定コードが使用されるのと同様に、NVCも充分に使用されているのである。ただ、その機能に相



違があることに、注意しておかねばならないだろう。その点について、筆者なりに整理して述べておきたい。

限定コードに付随したNVCは、差異化の機能を果たしていると考えられる。つまり、共同性や連帯性を基盤とした限定コードのなかで、唯一、他者との違いを強調するものであり、個人的な特徴というものは、このNVCのコードを通してのみ行われることになる。

一方、精密コードに付随したNVCは、テキストをつくる機能をもっていると考えられる。つまり、精密化された言語においては、言語の選択や使用法が個人の特徴となるため、唯一、NVCが連帯性を強調する役割を果たすと考えられる。例えば、学会発表のような、高度に精密化された言語コードが使用される場合において、ちょっとした目配せや、うなづきが大きな連帯性や協調性を示すことを考えても、このことが、充分に理解できよう。

### 三、NVCの機能と非言語メディア

今までのところで、若干、触れたように、NVCは、体言コードを通して作用する。それらのコードで表される具体例は、音声、視線、身振り、距離といった非言語メディアであ

る。VCが、主として人間の聴覚と視覚に依存するのに対して、NVCは、人間の五官（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）を通して認識・伝達される。

しかし、このコードは、現在の具体物についてのメッセージしか伝えることができない。つまり、話し手の現在の態度や感情を示すことはできるが、過去の驚きや悲しみといった自分の感情、あるいは、民主主義のような抽象的な事柄を示すには適さないのである。そして、このコードの決定的な特徴は面と向かってのコミュニケーションか、伝達者が実存している場合のコミュニケーションに限定されることである。

NVCのチャンネルによって、その伝達特性も違ってくるために、NVCの機能は大まかに二つに分けられる。<sup>⑬</sup>

第一の機能は、表示される情報の伝達機能である。社会的地位などを含んだ状況について、相手が知覚するであろう話し手の感情や情報を伝達することである。

第二の機能は、相互作用、関係性を処理する機能である。例えば、身振り、姿勢、声のトーンなどで、コミュニケーションの流れをコントロールしたり、相手を自分から遮断したり、説得効果を及ぼしたり、あるいは、会話の終焉や相手の発言を促すことなどが、その例となる。

説得効果については、松本卓三の実験結果によれば、NVCのチャンネルのなかでも、視線や身体の方角のようなものが、より強い説得効果を及ぼすということが、明らかになっている。<sup>13)</sup>

さらに、パターソン (Patterson, M. L.) は、NVCの機能を五つに分類している。<sup>14)</sup> それらは、①情報の提供、②相互作用の調整、③親密さの表出、④社会的コントロールの実行、⑤サービスや作業目標の促進、である。

パターソンのいう五つの機能は、すべて、前出の二つの機能に収斂されると考えられる。このように見ると、これらが話し手自身やその内容よりも、話し手と聞き手の両者間における関係を表すコードとして作用していることは明らかである。

人間の身体は、体言コードの主要な送信機能であると考えられる。アーガイル (Argyle, M.) は、非言語メディアとして、一〇の項目をあげ、それぞれが伝える意味を示唆している。<sup>15)</sup> それらの項目とは、①身体接触 (body contact)、②プロクシミティ (proximity)、③方向 (orientation)、④容姿 (appearance)、⑤うなづき (head-nod)、⑥表情 (facial expression)、⑦身振り (gesture)、⑧姿勢 (posture)、⑨視線公差 (eye contact)、⑩発話の非言語的側面 (non-ver-

bal aspects of speech) である。

NVCは、五官を通して伝達されるが、視覚によるメッセージは、先に触れたアーガイルの非言語メディアの項目で言えば、プロクシミティ、方向、容姿、うなづき、表情、身振り、姿勢、視線公差がこれに当たる。では、この八つの項目について、順に検討を加えていこう。

まず、第一に、プロクシミティはどのように他人に接近するかによって、その関係性を示すものである。例えば、距離による特有の形態があつて、それらは親密的であつたり、公式的であつたりする意味が含まれている。もちろん、この間合いの取り方は、年齢や性別、個性、態度といった様々な要因に左右されるところが多いのであるが、対話という状況においては、文化背景が大きく関わりと考えられる。したがって、文化形態によって、パーソナルスペース (personal space) は大幅に異なってくる。バーガス (Vargus, M. F.) によると、通常、「近接的文化形態に属するのは、ラテンアメリカ、南ヨーロッパ (特にフランスとイタリア)、それにアラブに住む民族などである。アジア (特に中国、日本、タイ、フィリピン)、それに北アメリカ (アメリカ人、カナダ)、オーストラリアに住む人達の文化形態は非近接的なものと見なされる」<sup>16)</sup>

第二に、方向について考えよう。これは、他人に対してどのような角度を取るかによって、メッセージを送るのである。例えば、向かい合っている場合は親密や攻撃の意味を示し、九〇度の角度をなしている場合には、協力的な立場や態度を示している。

第三に、容姿に関して、アーガイルはこれを、コントロール可能な髪型や服装のようなものと、コントロール不可能な身長や体型などのようなものと、二つに区別して考えている。<sup>17)</sup>コントロール可能なものは文化的背景に依存しており、それらは性格（人格）・社会的地位として、特に帰属を示すことができる。

第四に、うなづきは、主に話し手と聞き手の両者における会話の順序などの管理の作用を持つ。相手がしゃべり続けることを許可したり、制止したり、あるいは、自分がしゃべりたいことを示すこともある。

第五に、表情は目・鼻・口などの形や大きさといった下位コードによって分析され、表情は、これらの組合せによって、決定される。しかし、これらは比較文化の変数というよりは、普遍性を持つ体现コードとして作用する。

第六に、身振りは、VCを補足したり、感情の状態を表すものである。まず、断続的に強調される身振りは、行為その

ものが、直接意味を持つものとして作用する。そして、流動的で連続的で循環性の身振りは、そのときの感情の説明として作用することがある。しかし、アーガイルは、これとは別に、「OK」やVサインのようなシンボリックな身振りもVCとしてとらえ、そして、手招きのような慣習的な身振りもあるとしている。<sup>18)</sup>このことについては、改めて検討を要するところである。

第七に、姿勢は個人間の態度に大きく関係する。例えば、友情・敵意・優越は、ほぼ姿勢によって示される。また、姿勢は、感情はもちろん、緊張の度合いの目安にもなる。興味深いことに、人間にとって、姿勢は表情よりコントロールしにくいのである。例えば、不安は顔に表さないようにできても、姿勢によって見透かされるかもしれない。

第八に、視線交差はどのくらいの頻度で、どのくらい長時間、他人の目を見るかが、メッセージ効果につながる。

会話のはじまりやはじめの方の視線交差は、話し手と聞き手の関係性において重要な役割を果たし、会話の進行に多大な影響を及ぼす。具体的には、話し手の優越や参画、注意を払って聞いて欲しいことを要望するものになることもある。それから、会話の終了近くや後の視線交差は、親密性やフィードバックの願望、聞き手の反応の観察など、より重要なコミュ

ニケーション効果を担うものである。

非言語メディアは、視覚以外のものにも見られるだろう。触覚や嗅覚、味覚、聴覚にも非言語的な側面は備わっていると判断される。この点について検討を加えておきたい。

まず、触覚は身体接触である。これは、いつ、どこで、誰に触れるかによって、重要なメッセージを伝えることになる。これは文化背景に大きく影響され、異文化間で最も変化が現われるものである。

嗅覚や味覚はアーガイルの非言語メディアのなかに示されていないが、これらも重要なメディアとなるといえるだろう。例えば、フェロモンである。嗅覚における非言語メディアの研究はあまり進んではないが、アンドロステロンが陽気にさせたり、親密な気分させるのは確かなようである。<sup>19)</sup>

聴覚は会話の非言語的側面である。これは二つのカテゴリーに分けられる。<sup>20)</sup>一つはプロソディックコードである。これは、使用される言葉の意味に影響を及ぼし、ここでは、ピッチとストレスが主なコードとなる。もう一つはパラダイムのコードである。これは、話し手についての情報を伝達するトーン、ポリューム、アクセント、言いまちがい、話のスピードなどがある。これらは話し手の情動的な状況、性格、階層、社会的地位、聞き手に対する見方などを示すことになる。

実は、このコードが、概して、バーンステインのいう限定コードに似ている。

体現コードは、伝達者が現存することを前提とし、伝達者の、そのときその場所における情動的な状況説明、あるいは、関係性の伝達を統制する。そして、限定コードも、話し手の情緒的な状況、性格、階層、社会的地位、聞き手に対する見方などの関係性の相違や変化から知覚するメッセージを重視するのである。

### おわりに

このように考えていくと、限定コードが、いかにNVCを重視し、何を伝えるかよりも、むしろ、どう伝えるかに重点を置いたものであるかが明示される。

同時に、ある社会関係がコードを決定するとき、そのコードが、何が支配的なコードなのかによって、NVCの機能と効果に差が生じ、また、その価値判断にも大きな影響を及ぼすと考えられる。しかしながら、バーンステインの精密コードと限定コードが、イギリスの社会を中心に考えられた概念であり、この概念が、そのまま日本の社会に適用できるとは限らないのではないかという批判があることも事実である。

この批判に関しては、充分に検討されるべきではあるが、日本社会において、コードの違いがないと考えるのは間違いである。何故なら、精密コードが奨励される会議などの場面において、限定コードが頻繁に使用された場合、建設的な取り決めは決してはかどりはしないことを、我々は体感しているからである。また、NVCの重要性においても、看護過程のコミュニケーションが、接触や表情などの使用によって、言語のみではまかないきれない不安や心配の解消、信頼の構築を助成していることも認められる。

本稿に言及し得た論点については、具体的な臨床例に基づいた分析が肝要となるであろう。この点については、後日、稿を改めて検討を加えることにしたい。

## 註

- (1) Shannon, C. E. and Weaver, W.: The mathematical: Theory of communication 1949
- (2) アナログ、デジタルという考え方は、コミュニケーションエンジニアたちに使用されている用語である。
- (3) こうした伝達機能の類型は、定説になっている。例えば、古田暁監修『異文化コミュニケーションキーワード』(一九九〇年、有斐閣)といった教科書的な文献においても見られる。

- (4) ベイトソン・G/ロイシュ・J、佐藤悦子、R・ボスバーク訳『コミュニケーション』(一九八九年、思索社) 一八二〜一八九頁
- (5) この図化にあたっては、池宮正才先生(中部大学女子短期大学)より御教示をいただき、作成した。
- (6) バーンステイン・B、萩原元昭編訳『言語社会化論』(一九八一年、明治図書) 一四九〜一七二頁
- (7) バーンステイン・B、前掲書、九二頁
- (8) バーンステイン・B、前掲書、九一〜九七頁
- (9) バーンステイン・B、前掲書、一〇七〜一〇八頁
- (10) バーンステイン・B、前掲書、一〇八〜一一二頁、一五五〜一六三頁
- (11) バーンステイン・B、前掲書、一六一頁
- (12) Fiske, J.: Introduction to Communication Studies (Methuen 1982) p.71
- (13) 松本卓三『非言語コミュニケーションの説得効果』(『岡山理科大学紀要』第二三号) 二三頁
- (14) Patterson, M. L.: Nonverbal Behaviour: A functional perspective (Springer-Verlag 1983) p.131
- (15) Argyle, M.: The Psychology of Interpersonal Behaviour (Harmondsworth: Penguin Books) p.87
- (16) ベーガス・M・F、石丸正訳『非言語コミュニケーション』(一九八一年、岩波選書) 一五二〜一五三頁。
- (17) Argyle, M.: Bodily Communication (Methuen 1975)

p.338-343

- (18) Argyle, M., op. cit. p.251-271
- (19) バーガス・M・F、前掲書、二二二～二二三頁
- (20) Argyle, M., op. cit. p.343-346

参考文献（引用文献を除く）

- ・岡部朗一『異文化を読む』（一九八八年、南雲堂）
- ・バーンステイン・B、萩原元昭編訳『言語社会化論』（一九八一年、明治図書）
- ・W・フォン・ラフラー・エンゲル編、本名信行他編訳『ノンバーバル・コミュニケーション』（一九八一年、大修館書店）
- ・ホール・E・T、国広正雄・長井善見・斉藤美津子訳『沈黙のことば』（一九八九年）
- ・マクウェール・D／ウインタール・S、山中正剛・黒田勇訳『コミュニケーション・モデルズ——マスコミ研究のために』（一九八六年、松籟社）
- ・Argyle, M. Social Interaction" (New York : Atherton Press 1969)

（大学院博士前期課程）

〈付記〉

本稿は、修士論文の一部を加筆修正したものである。尚、作成にあたり、東横女子短期大学の川村久美子先生、聖徳大学の佐藤智美先生より、関連文献の紹介とコメントをいただいたことに対して、深謝いたします。